

團藤文庫・東京帝国大学特設防護団法学部団関係史料解題

太田 宗志

文庫には、團藤重光(以下「團藤」と称する)の戦時中の活動履歴を示す史料群があまた存在する。そのうち、本史料は、團藤が戦時中に中心的に関与した東京帝国大学特設防護団法学部団に関する簿冊とノート(計2点)である。

團藤は、自伝『わが心の旅路』において、戦時中の履歴を振り返り、1942(昭和17)年6月から1943(昭和18)年5月まで東大特設防護団法学部団(部局団)の総務班長兼参与を務め、東大の防空業務の一翼を担っていた過去の思い出を語っている¹。この團藤の語る思い出を裏付けるのが、本史料である。

一つは、『防護団当番記録』(以下、「記録」と称する)と題する簿冊である。記録は、昭和17(1942)年7月1日付で作成され、法学部団に所属する教官(教授・助教授)によって日報形式で記述されている。記述期間は、昭和17年7月3日より昭和20年9月4日までである。そして、もう一つが、團藤の手による『防護団ノート』と題するノート(以下「ノート」と称する)である。ノートは、團藤が総務班長を務める上での雑記帳であり、宿直当番に関する事項(配置の調整や具体的配置)や総務班長会議、各学部団との協議、防空に関する学内研修の内容等が記されている。

最後に、これら史料を公開することの意義について一言する。

これまで、東京帝大特設防護団(とりわけ各学部団等)の実際の働きを示す史料は乏しかったように思われる。本史料の公開により、東京帝大特設防護団の活動・実態の一端が明らかとなり、東京大学史の空白が解明される一助となろう(教官当番制を中心とした東大法学部団の防空体制の実態や全学防空訓練の様子、1945年5月25日の山の手大空襲をはじめとする東京の空襲の様子などが史料から読み取れよう)。

また、本史料は、團藤の総合的な人物研究を行う上でも重要であろう。文庫においては、1939年、1942年、1945年の日記は未だ発見されておらず、上記期間の團藤の履歴を追うことは困難である。本史料は、團藤の戦前期の不明の足跡を明らかにする点においても人物研究上重要である。

以上

¹ 團藤『わが心の旅路』(有斐閣・2001年)94～95頁参照。「戦時下の研究生生活」の章において描かれている。

東京帝国大学特設防護団法学部団関係史料一覧(オンライン公開)

- ・『防護団当番記録』(紐綴じ(2か所)、21.2×16.5)
- ・『防護団ノート』(表表紙に「團藤重光」とスタンプあり、19.5×14.7)

※上記のほか、下記5点を所蔵している。

- ・『時局防空必携 昭和十八年改訂』(内務省、裏表紙に團藤の自筆サインと住所の記入あり)
- ・『東京帝国大学教授 医学博士 都築正男 防空救護について』
(東京帝国大学全学会、昭和17年3月)
- ・(文書類)「防護団当番日割り」(法学部団、昭和20年7月、2枚もの)
- ・(モノ資料)腕章(「法参与 総務班長」と赤書きあり)
- ・(モノ資料)腕章(「特設防護団 東京帝国大学 法警護班長」と印字済み、なか紫一本線)

※また、本史料に記述される人物(東大教官、特別研究生、事務官、学生)の内、学生に関しては史料データを加工し伏せ字とした。史料をご覧になる際、注意いただきたい。